

## 植物検疫の現場から(9)

リレ一随筆

## 輸入木材検疫もやま話

昨年の初夏、名古屋から高山を経て富山への道をドライブする機会があった。喧騒の街中を抜け、車が木曾川沿いを走るときは、左右の山々の鮮やかな新緑が目にしみてくる。また、周囲は整然と植林されたヒノキ林が連なり、眼下には山からの清水が川となり岩を噛む。心む風景を満喫した一日であった。

このように、わが国土の75%は山林で、緑滴る国といわれているが、戦後の急速な経済発展に伴い大量の木材を海外から輸入している。ピーク時の昭和40年代の輸入量は3,000万 $m^3$ であったが、近年地球規模での環境保全が叫ばれ、原木の取り引きは減少しており、平成5年には2,356万 $m^3$ が輸入されている。

植物防疫所では、国内の森林保護を目的として、輸入木材の検疫を行い、諸外国からの病虫害の侵入阻止を図っている。今回は、輸入木材検疫の一端を、現場の体験を交えながら紹介したい。

わが国に輸入される木材は、東南アジアの熱帯雨林からの南洋材、旧ソ連からの北洋材、北米大陸西岸からの米材とその他、に大別されている。外国で切り出された木材は在来船やコンテナ船でわが国の港に着くと、大半は海に直接落とされ、筏師といわれるプロによって筏に組まれ、水面貯木場に運ばれている。丸太の上をまるで忍者のごとく軽々と飛び渡り、次々と丸太を操る技は驚きである。一方、陸揚げされるものは木材専用の大型フォークリフト等を使って土場(貯木場)に積み付けられる。植物防疫官は、ヘルメット、安全靴に身を固め、通称「ハツリ」という小型の斧に蔦口を付けた道具を一本持ち、ポケットには採集する害虫を整理するガラス瓶及びビニール袋を持ち、木材検査に赴く。

検査は、このハツリを使って樹皮を剥ぎとったり、虫糞を出している虫孔深く潜んでいるキクイムシなどを掘り出して、木材に寄生する害虫を発見する。

経験のある植物防疫官は、わずかに噴出している虫糞や樹皮の色をただで、害虫の有無を判断し、揺れる筏の上で簡単に虫を掘り出し、手品を見ているように次から次へと検査をしている。しかし、新米の検査官にとっては、不安定な足元ばかり気になり、なかなか検査まで手が回らず、樹皮を剥いだ木材の表面は、ヌルヌルになっており、筏から足を滑らし海中へドボン……ということもしばしば体験する。筆者も経験者の一人で、特に雪の降る北陸の海に落ちたときを

思い出すと、今でも身震いする。

南洋材を運んでくる船内には、歓迎されない密航者がしばしば発見されている。体長15cm以上あるサソリや、長さ1mほどの緑色のヘビが発見され、植物防疫所へ持ち込まれ動物園に寄贈しようとしたところ、有名な毒蛇、グリーンスネークと判り、丁重に断われたこともある。

北洋材は、旧ソ連の沿海州やサハリンから輸入されていたが、近年はナホトカから約2,000km以上離れたバイカル湖の周辺からも切り出されている。酷寒の地からなので、木材には虫も付かないと思われるだろうが、カミキリムシの幼虫などは材の中でじっと春を待っている。また雪解けを告げる4、5月になると、樹皮の一部に小さな孔が1、2か所発見できるようになり、これはキクイムシの雌雄が交尾のために侵入する孔で、まさに春である。

米材は、カナダ、アメリカ合衆国等北米から輸出され、近年流行のログハウス用材としても有名である。以前は貴婦人のような、すらりとしたダグラスファーの長い材を検査したことがある。これらはすべて電柱として用いられていたが、昨今の街でみかける電柱はすべてコンクリート製で、寂しい思いをしているのは筆者のみだろうか。

また、アフリカから輸入されたブビンガという材は、直径が3m以上あり、梯子を使い、材の周りを蟻がはいざり回るようにして検査をしたことを覚えている。

このほかにも中南米、ニュージーランド等世界各国からいろいろな木材が輸入されている。

これまで検疫で発見された害虫は、キクイムシ、ゾウムシ、キバチ等16科1,100種が記録されている。このうち、キクイムシ科では、1980~1986年の間に植物検疫で発見され、新種として記載されたものが、180種に上っている。不合格になった材は、本船くん蒸、天幕くん蒸及び薬剤散布等の消毒が行われる。

わが国の森林は材木の供給のほか、水源の涵養、土砂の流出の防止、国民のレクリエーションの場の提供など、大切な資源である。木材検疫に携わる植物防疫官は、輸入検疫で発見される木材害虫標本の収集や生態等を学習しながら、今日も、日本の港に輸入される木材の上をハツリ一本かついで、キクイムシ、カミキリムシ等と知恵比べをしつつ森の緑を守っている。

(名古屋植物防疫所 鈴木 貢)